

# 十二所城下を巡る大館歴まち散歩

1. 日 時 平成30年7月21日(土) 9:00~12:00
2. 主 催 大館市 建設部 まちづくり課
3. 案内者 ・前十二所公民館長 前田 進 ・現十二所公民館長 畠山 定久
4. ねらい 歴まち散歩をとおして当時の人々の生活や文化を知る。
5. 見学コース

大館市立中央公民館 ~ 十二所公民館 ~ 成章書院跡 ~ 十二所城代茂木家墓地 ~  
8:30 出発 9:00~9:05 9:10~9:30 10:00~10:30

長興寺 ~ 番所跡 ~ 三階橋 ~ 十二所城跡 ~ 大館市立中央公民館  
10:40 ~ 10:50 ~ 11:00 11:20~11:40 12:00 解散

## ◎見学ガイド

### 十二所の町づくり

東北地方は古くは蝦夷地であったが、平安時代になると中央政府に帰順した蝦夷の長が官職を与えられて、それぞれの地方を支配していた。

十二所地方は、平安時代後期の嘉応2年(1170)に藤原秀衡の一族の藤原肥後ひごが地頭となり藤原岱えぞに居住した。(現在の名字の藤原はこれによる。)

永正15年(1518)には、独鈷よしのぶに居城した浅利氏の家臣が十二所に配置され、十二所信濃と名乗った。(この子孫は中山氏である。)浅利氏は十狐城を本拠地に、大館城などの城館を広範囲に築いてこの地方を開拓した歴史がある。

慶長7年(1602)に国替えで佐竹義宣が秋田に移り、元和元年(1615)に塩谷義綱しおのやよしつなが十二所城じょうだいの城代に任命され、本格的に城郭の建設と城下の町割りを行った。その名残が現在の町なみに色濃く引き継がれている。



「十二所町総景図」(蓑虫山人全国周遊絵日記より) 猿間側から見た舟場周辺(明治22年頃)

## 明治維新

明治維新により、版籍奉還、廃藩置県などが進められ、明治4年(1871)1月に久保田藩は秋田藩と改称され、7月には秋田県となる。また明治4年(1871)4月に戸籍法が制定され、翌年2月に施行された。

行政組織の再編により地方行政地域を大区、小区に区画する大小区制を実施。その後、明治11年(1878)に郡町村制となり、明治17年(1884)に大館町役場が現在の市役所の向かいに新築された。明治22年(1889)4月に市町村制が施行され、現在の大館市を構成している町や村が生まれた。

## 合併の変遷

十二所町は、明治22年(1889)4月1日の市町村制施行により、道目木村・葛原村・猿間村・軽井沢村・曲田村と合併。

昭和30年(1955)3月31日に大館市へ編入。昭和30年の人口は6,220人。

## ○成章書院跡 学問の振興

久保田藩では、幕府や諸藩の文教政策をうけて、教学振興と給人子弟の養成を目的に郷校を設立した。

大館では寛政5年(1793)頃に現在の中城地区に博文書院が設立された。また、十二所には成章書院が設立されている。

博文書院の創立当時の規模は、教職員35名、学生数90名で、成章書院は同じく教職員28名、学生80名であった。

町人の、同志・同学の人たちは、みずからの教育機関として家塾をつくり、村々では、農民たちが寺子屋をつくった。この家塾・寺子屋は、江戸時代中頃から広く各地に設けられ、幕末期の家塾の数は、大館町で14ないし15、十二所町では12から13を数えた。

成章書院は、寛政12年(1800)に校舎が建立された。その後戊辰戦争で焼失したが、明治3年(1870)に再建され、明治7年(1874)に「成章学校」に引き継がれている。



## ○十二所城代茂木家墓地（史跡）

十二所茂木家墓地は、十二所駅南側の台地上に設けられ、十二所茂木家第3代<sup>ともぶ</sup>知暢以降の代々の墓が残されていて、家中29家の墓地も西側に併設されている。

茂木氏の祖は、源頼朝の異母弟である八田知家である。知家は有能な人物で鎌倉幕府の創立に際して重要な役割を果たし、関東の3名将の1人に数えられた。

その勲功により、下野国茂木荘（現在の栃木県）とその近郊を賜り、第2代知基<sup>とももと</sup>から姓を「茂木」と改めました。

慶長7年（1602）に第18代治良<sup>はるなが</sup>は、佐竹義宣<sup>よしのぶ</sup>に随って秋田に下り、天和3年（1683）に第21代知恒<sup>ともつね</sup>が十二所城代に任じられ10代187年間にわたり南比内の治安と南部藩への警備にあたりました。茂木家の墓地は、市の文化財として守り伝えられている。

十二所茂木家初代知恒<sup>ともつね</sup>、同第2代知量<sup>ともかず</sup>は、羽後町の茂木氏菩提寺能持院に墓が残されている。



## ○長興寺

元和元年（1615）十二所城代に、塩谷義綱が配置される。塩谷氏に従って寛永6年（1629）に移転をした菩提所が塩谷山長興寺であった。

塩谷氏は延宝7年（1679）に角館へ配置換えとなるが、長興寺は十二所にそのままの残り、現在に至る。

塩谷氏は宇都宮氏一族で、かつて下野国塩谷荘（現在の栃木県）を領有していた。

長興寺の寺号は、宇都宮業綱次男で塩谷朝業の法名「長興信生」に因む。栃木県矢板市館ノ川、川崎城の西に現在も長興寺は続いている。



## ○十二所境口番所跡

十二所は南部藩と国境を接していたので南部藩をはじめ、他領のものが入り込む機会も多く、それを取り締る必要があった。

そこで延宝7年(1679)に町の入口付近に境口御門及び番所を設置し、役人として十二所の給人武士5人と足軽2人を任命してその職務に当たらせた。

仕事の内容は、明け六つと暮れ六つ(標準は午前6時と午後6時で、季節により弾力的に取り扱った)の門の開閉及び日中の通行人の取り締まりであった。

南部藩方面から十二所町に来る場合は、番所役人の厳しい取り調べを受けることとなる。夜間は通行が禁止されたので、米代川で馬を洗う者も日中のうちに済ませた。



## ○三階橋 十二所と戊辰戦争

ぼしんせんそう

### 戊辰戦争とは

明治元年(1868)の干支が「<sup>つちのたつ</sup>戊辰」であったことから「戊辰戦争」と呼ばれ、鳥羽・伏見の戦いから始まって上野戦争、北越戦争、二本松戦争、会津戦争、秋田戦争、函館戦争などの総称をいう。

戊辰戦争の勝利により、薩摩・長州藩を中心とした新政府勢力は日本を掌握、明治維新という近代国家の出発点となった。

戊辰戦争は旧幕府勢力を一掃する征討であったため、会津や庄内藩など奥羽諸藩は「朝敵」「賊軍」として一方的に標的とされ、奥羽諸藩同志が争うという悲劇をもたらした。

大館での戦いは、明治元年(1868)8月9日から9月20日までの43日間におよび、南部軍は総数1,700人以上の兵力を動員しており、大館側も新政府軍の援軍とともに交戦している。

これほどの大軍の進攻を直接受けた大館地方の被害は大きく、十二所、扇田、大館、二井田は町や村そのものが戦場となったため、多くの家々や収穫前の農作物が灰になり、人びとは、衣食住が欠乏の状態ですべての復興への歩みを始めました。

十二所地域は、南部藩と境を接していることから8月9日に南部軍が雪沢口・葛原口・十二所口・別所口から攻め込んできた。

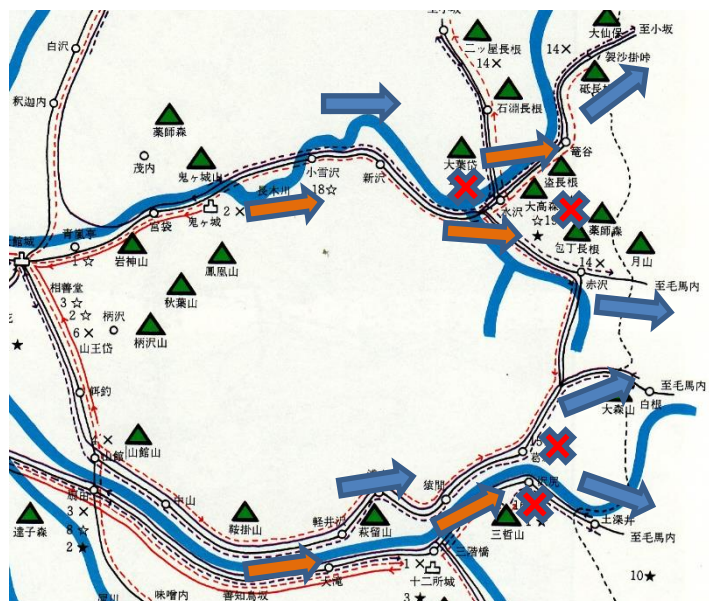
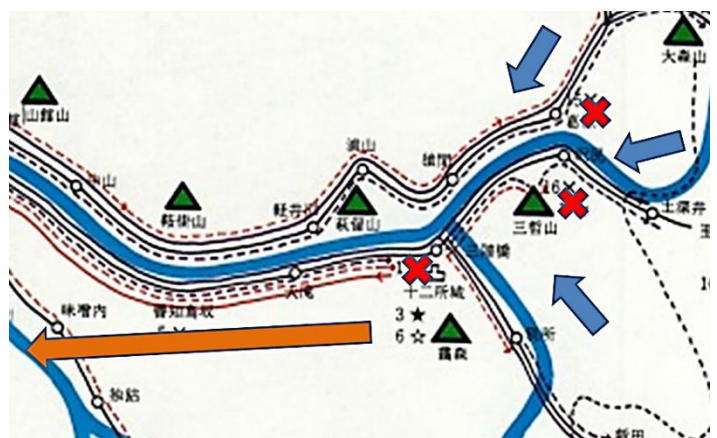
総大将の<sup>ならやま さど</sup>檜山佐渡の率いる本隊550人は、花輪から尾去沢十文字峠を越え十二所口に進み、その遊撃隊203人は別所口より侵入した。総参謀の<sup>くろうど</sup>向井蔵人、番頭の<sup>ゆうきつ</sup>桜庭祐橋ら率いる612人は葛原口から、毛馬内の給人ら331人が雪沢口から一斉に境を越えて秋田領に進撃した。

迎え討つ十二所勢は、<sup>もてぎちくご</sup>茂木筑後隊が約200人、援軍部隊の<sup>せいざぶろう</sup>須田政三郎隊が約20人で、<sup>さんかいぼし</sup>三階橋を挟んで交戦するが、1時間余りで退却を余儀なくされ、十二所本陣に火をかけ岩瀬まで退いた。

南部軍の圧倒的な兵力と強烈な防備により戦いは熾烈をきわめた。

扇田神明社の戦闘、大館城の攻防、岩瀬の激戦、大館城回復の戦いを経て、9月7日には十二所奪還のため、大滝・曲田などの戦闘で南部軍を徐々に退却させ、9月15日の新沢口や十二所口の戦いで勝利した。

9月20日に南部軍の使者が停戦を申し込んできたことにより、大館での43日間に及ぶ戦いが終わった。



## ○十二所城跡

十二所城は、十二所町の南側台地に築かれ、浸食谷を空堀とし、浸食谷により孤立した4つの台地を郭とした構造になっている。

中世は浅利氏家臣十二所信濃が居住し、浅利、秋田、南部の抗争の中で幾度か城主を変え、佐竹氏国替え後は赤坂朝光が守備についた。

元和元年(1615)に塩谷義綱が所預に任命され、翌年十二所の町割りが実施された。

本丸を含む城館は、南方台地の東端に築城し、侍屋敷の一部は、本丸と空堀で

隔てた西方台地に設けられた。台地北側の崖下から米代川までは、一帯の沼地を埋め立てて、侍屋敷の大部分と町民町を移築した。

しかし、本城は、幕府の一国一城令によって、元和6年(1620)に破却となり、それに替わって居城「再来館」が本丸跡に改築された。その後、城下町の一画に移築し、幕末まで茂木氏が居城したが、戊辰戦争の際に焼亡した。

やがて明治時代となり、版籍奉還が行われ、平安の時代から七世紀に亘って幾多の変遷を重ねた十二所城は、その幕を閉じることとなった。

